

## 利用者にとって魅力ある図書館づくり—看護教員の立場から

前田 和子

MAEDA Kazuko (Okinawa Prefectural College of Nursing), Efforts to Make a More Attractive Library for Users : From the Viewpoint of Nursing Faculty. *Nursing and Information* 2007;14:25-26

キーワード：魅力ある図書館, 利用者, 看護教員

attractive library, user, nursing teacher

私は、2年前に沖縄県立看護大学に赴任し、はじめて単科大学に勤務することになった。

沖縄県立看護大学は平成11(1999)年4月に設立されたが、開学5年目の平成16(2004)年には大学院保健看護研究科博士前期課程および博士後期課程が同時に開設され、確実に発展を遂げつつある小規模な大学である。ここで、今新米の附属図書館長を務めている。今回、日本看護図書館協議会の個人会員として、教員の立場から「魅力ある図書館づくり」を書くようにとの依頼を受けたことは、本学の図書館づくりについて勉強する機会を与えられたとお引き受けした。

本学赴任前は、1つの構内に中央図書館を含め4つの図書館をもつ筑波大学、そして看護学科を含む4学科をもつ茨城県立医療大学に勤務していた。そこでは、優秀な諸先輩の下でさほど自らが努力することもなく、図書館の恩恵を充分受けてきた。しかし、学生数が350名弱であり、歴史も浅く、決して経済的に裕福とはいえない県立の単科大学において「魅力ある図書館」はどう作っていったらよいのだろうか。

一般的に、「魅力ある図書館づくり」のために私たちがなすべきことは、1993年に出された「大学図書館機能の強化・高度化の推進について」の報告書の提言の中にある<sup>1)</sup>。学術研究情報ネットワークを活用した大学図書館機能の充実と大学間協力等の促進、図書館資料の計画的収集・重点的収集、図書館資料の効果的保存と利用、学習活動の場としての図書館機能の強化、大学図書館員の育成・確保、大学図書館における自己点検・評価と総合的な大学図書館政策などを検討し、進めていくことである。

具体的に「魅力ある図書館」を考えると、誰にとってかという視点が大事だろう。本学附属図書館の利用者には、学部学生、博士前期課程および博士後期課程の院生、教育研究者である教員の他に、学外者がいるが、それぞれにとって「魅力ある図書館」像はちがうだろう。図書資料の収集、利用規則など教員が主体となって作っ

ていくので、どうしても教員にとって「魅力ある図書館」が作られがちになる。ある関東在住の博士課程の学生が、今まで、数校の大学図書館を利用してきたが、一番利用しやすかったのは茨城県立医療大学附属図書館だったと話してくれたことがあった。なぜなら、読みたい図書の所蔵をインターネットで確認し、自宅から当該図書館まで車で1時間半以上かけて出かけて行っても、ほとんど裏切られたことがなかったからだという。ほかの歴史ある大学図書館では検索で所蔵ありと確認できても、図書館内になく領域や講座単位の研究室や図書コーナーに図書が分散されていて、場所を探し当てるまでに時間や手間を要し、やっとたどり着いても研究に必要な資料と閲覧を断られることもあったということである。茨城県立医療大学附属図書館設立に関わった経験がある私は、彼女の話に納得できた。茨城県立医療大学附属図書館の設立時には「本学図書館は第一義的には学生のためにある」という学生中心主義のモットーが貫かれていたからである。しかし、今でも、最新の専門書は研究図書として教員個人の手元にはあるけれども、学生や院生が閲覧できやすくするには整備されていない図書館があるということをちょくちょく耳にするのは残念なことだ。

本学図書館の話に戻りたい。沖縄県の特徴は東西1,000キロ、南北400キロにわたる広大な海域に、沖縄本島を含め住民が住む40の島々が点在しているということである。本学は本島の県庁所在地、那覇市にある。沖縄県には平成19(2007)年4月開設校を含めていわゆる看護系大学が3校、その他の大学4校、看護学校4校があるが、いずれも本島中南部に集中しており、それ以外の島には一つもない。しかし、本島以外の島にも、県立病院や診療所、保健所、市町村役場があって、看護職者が数多く働いている。本学の卒業生もいる。彼らは勉強したいと思っても、身近に利用できる専門図書は限られているので、不便を感じているはずである。彼らが日進月歩の医学や看護学の知識から取り残されてはならない。

県立大学である本学は、社会貢献の一部として学外の看護職者の職業発達のために附属図書館を開放し、図書の貸し出しサービスを行っているが、図書の貸し出しサービスは本島在住者に限られている。県の中でも恵まれている地域にいる人々にサービスし、本当に困っているであろう離島・へき地の人々にサービスをしないというのはいささかおかしい話であるが、理由はかつて返却期日を守らない者がいたことにあり、督促に大変手こずった経験からきているようだ。茨城県には水戸市の県立図書館で借りた図書を土浦市近くの県立医療大学図書館に届けば、車の定期便で県立図書館に返却してくれるシステムがあったが、交通手段が船か飛行機しかなく、しかも距離的にも遠すぎるとあっては今のところお手上げである。しかし、何とか知恵を絞って早急に解決策を見つけないかと思っているので、よいアイデアがあったら是非教えてもらいたい。

「魅力ある図書館」を作るために、図書館がよく利用されているか、利用しやすいか、利用者が求める情報を提供しているかを定期的に評価したいと思っている。本学では、入館者数、個室利用状況、グループ学習室利用状況、学内（学生・学年・院生・教職員別）・学外者別貸出冊数、ノートパソコン貸し出し状況、相互協力業務状況、電子複写、図書館員業務内容、督促状況などを、附属図書館運営委員会ですべて毎月分析し、教職員連絡会議で報告をしている。

たくさんの図書館資料が充実していても利用する人が少なければ宝の持ち腐れである。学生や院生が図書館を利用し資料を活用するように、教員は、授業を工夫して能動的学習を促すように動機づけねばならない。効果的に図書館機能を利用できるように、図書館資料を検索し、入手できる能力を身につけさせるためのガイダンスや研修なども図書館員と協力して計画的かつ継続的に進めなければならない。

さらに「魅力ある図書館」の条件の一つは利用のしやすさだろう。以前もそうであったが、情報化時代といわれる今日になって、一つの大学で利用者全員が必要とする図書をすべて揃えることはますます不可能な時代となった。したがって、大学間協力が欠かせない。大学間協力に関して、本学の上田学長からピッツバーグ大学留学時代の話聞く機会があった。1960年前後の話だというから、もう45年も前の話である。当時からピッツバーグ大学附属図書館は、土曜日は夜9時まで、日曜日は午後1時から5時まで開館していたそうである。本学の日曜日開館は9時から5時までとはいえ今年度からやっ

と開始したところなので、ずいぶん遅れをとっていることになる。また、図書館サービスは単に本や資料の検索だけでなく、他大学と提携して本の貸借もすでに行っており、さらにバスが定期的に週に2-3回往復し、教官や学生はこれを利用してお互いに他大学の図書館を充分に活用できるシステムがあったという。交通の便が悪く苦勞して琉球大学の図書館を利用している本学の学生や院生が聞いたら、本当にうらやましく思うことだろう。

本学では学生や院生そして学外者も要望する図書リストを直接図書館に提出できるが、どんどん要求があるというところまで至っていないので、もっとピーアールが必要かもしれない。何といっても良質の図書館資料の計画的収集の責任は教員にある。教員は氾濫する情報・図書等の中から良質のものとそうでないものを見極める目をもたなければならない。近年の看護関係の出版物の数の多さに驚く。まさに玉石混交である。4月に入学したての院生が「先生ショックです。新刊コーナーに漫画の看護の本が並べてあります」と研究室に報告に来たことがあった。教員が十分に吟味せずに図書目録から適当に抜き出して要望図書リストを出したのだろうかと思像した。良質図書を見抜くことと同じように、看護教員・研究者は学生や院生の教育そして看護職者の臨床実践に真に役立つ新しい知識の創出に務め、良質の図書館資料づくりにも貢献しなければならないことはいまでもない。

「看護と情報」編集委員会から受けた依頼は、教員の目からみた利用者としての魅力ある図書館づくりということであったが、書き終わってみたら、学生・院生・学外の利用者にとって魅力ある図書館づくりに、教員としてどう努力すべきかと言うことに重点をおいてしまっていた。最後に、教員の利用者として「魅力ある図書館」について一つ述べるとすると、図書館員への期待である。電子ジャーナルの普及、所蔵資料の電子化等ここ10年間に急速に進展し、大学図書館のあり方は大きく変化し続けている。この変化に多くの教員は戸惑っている。大学図書館の専門職員として必要な高度な知識・技能をもった図書館員に個人的サービスはもちろんだが、先見性をもって大学図書館の運営方針や方略を示唆してくれることを期待したい。

#### 参考文献

- 1) 竹内心、学術政策と大学図書館—解説：80～90年代の学術と大学図書館の政策、現代の図書館、2000;38(2):79-82.